

高崎市文化財調査報告書第234集

倉賀野下新堀遺跡

2008

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第234集

倉賀野下新堀遺跡

2008

高崎市教育委員会

序

私たちの町高崎市は、平成18年に倉渕村・箕郷町・群馬町・新町・榛名町と合併し、新生高崎市として生まれ変わりました。

未来に向けて発展を続ける高崎市ですが、古くは中山道、三国街道などの宿場町・商都として発展してまいりました。現在でも上越新幹線・長野新幹線や関越自動車道・上信越自動車道などの高速交通網が整備され、北関東最大の「交通拠点都市」として躍進しております。

この高崎市の中でも、倉賀野地区は古くから文化の中心地として発展してまいりました。特に、古墳時代においては、東日本でも最大級の前方後円墳である浅間山古墳が築造され、栄華を誇ったものと思われます。

この倉賀野地区に新しい都市計画道路が建設されることとなり、益々の発展が期待されております。高崎の古い歴史と新しい未来の様子を私達は見つめ続けていきたいと考えております。

平成21年3月31日

高崎市教育委員会

教育長 中 島 雅 利

例 言

- ・本書は土地区画整理事業に伴って事前調査された倉賀野下新堀遺跡(高崎市遺跡番号417)の発掘調査報告である。
- ・本遺跡は高崎市倉賀野町370他に存在する。
- ・発掘調査及び整理は高崎市教育委員会が行った。
- ・本遺跡の発掘調査は平成20年5月12日から6月19日まで行った。
- ・発掘調査は神澤久幸・黒田晃の2名が行い、調査の補助を山本ジェームズ・大野義人・赤見義和の3名が行った。
- ・本遺跡の整理作業は平成20年6月20日から平成21年3月31日まで行った。
- ・本書の編集は1・3章を黒田晃・2章を山本ジェームズが行った。
- ・遺構の写真撮影は黒田晃が行った。
- ・遺構の平面測量及びデジタルトレースは株式会社測研に委託した。
- ・出土した遺物及び各種原図は高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- ・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用した。
- ・遺構挿図中に使用した方位記号は、座標北を示している。座標値は国際座標を使用している。
- ・土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局(財)日本色彩研究所監修「標準土色帳」を使用した。
- ・遺構実測図の縮尺は原則として平面図を1/100、断面図を1/20・1/40とし、スケールを入れて示した。
- ・本報告書で降下火山灰の略号を使用する場合、下記のものを使用した。
 - ◎ As-C：浅間C軽石
 - ◎ Hr-FA：榛名二ツ岳噴出火山灰
 - ◎ Hr-FP：榛名二ツ岳噴出軽石
 - ◎ As-B：浅間B軽石
- ・本報告書で使用した地図は下記の通りである。
 - ◎ 国土地理院 地形図 「高崎」 1/25,000
 - ◎ 高崎市都市計画基本図 1/2,500

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

1	遺跡の概要	
1-1	調査に至る経緯	1
1-2	発掘調査の方法と経過	1
2	遺跡の位置と環境	
2-1	遺跡の位置と周辺の地形	2
2-2	周辺の遺跡	2
3	倉賀野下新堀遺跡の調査	
3-1	調査成果の概要	5
	1 トレンチの調査	7
	2 トレンチの調査	10
	3 トレンチの調査	10

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡及び遺跡の位置図	4
第2図	トレンチの配置と位置	5
第3図	調査区全体図	6
第4図	1 トレンチ平面図① 1号土坑平面図及びセクション図	8
第5図	1 トレンチ平面図② 2・3号土坑、1号溝平面図及び断面図	9
第6図	2 トレンチ平面図 4号土坑・2号溝平面図及びセクション図	11
第7図	3 トレンチ平面図① 畦エレベーション図①	12
第8図	3 トレンチ平面図② 畦エレベーション図②	13

1 遺跡の概要

1-1 調査に至る経緯

遺跡地周辺は市街化がかなり進んでおり遺跡地の上に農地が残存している状況で、土地所有者が単独で土地利用を行うのが困難な状況にあった。これを解決するため、土地区画整理を行う計画が立案されたが、開発予定地である倉賀野下新堀地域には、平安時代の水田などの遺跡が多数存在するため、開発部局と遺跡保存のための協議が重ねられた。しかし既に計画変更の可能性は残されていないことから、やむを得ず施設建設予定地の発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

1-2 発掘調査の方法と経過

調査対象地は開発予定地のうち道路部分にあたる約600m²である。調査以前は水田として活用されており、南東に向かって下がる地形を呈していた。調査区は大きく東西・南北・東西方向の3つに分割されることから、北から1～3トレンチの3つに分けて調査を行った。

これらの調査区に調査当初から設置されていた世界測地系に即した基準杭を活用し、図面作成の基準とした。

調査対象地の表土除去には重機を使用し、遺構確認作業及び覆土・A s-Bの除去作業については人力に拠った。

個別遺構の調査では基本的に主軸方向に直行する方向のベルトを残して掘削を行い、土層断面図と遺構平面図を作成した。遺物の出土位置に関しては、光波測距儀を用いて座標値を残した。図面作成においては、簡易遣り方測量と平板測量、光波測距儀によるドットマップの作成などを併用した。

写真は35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルム、及びデジタルカメラを用いて担当者が撮影した。

調査日誌抄

平成20年5月12日	調査用ユニットハウス建設
平成20年5月13日	調査用の機材をユニットハウスに搬入
平成20年5月15日	重機による表土掘削開始
平成20年5月22日	1トレンチよりA s-B除去開始
平成20年5月26日	2トレンチA s-B除去開始
平成20年5月27日	1トレンチより1～3号土坑・1号溝検出 2トレンチより東西方向の畦確認
平成20年5月28日	2トレンチA s-B除去完了。東西方向の畦2本検出。 精査の結果、1トレンチからも東西方向の畦検出。残存状態は良くない。
平成20年6月6日	3トレンチ東側よりA s-B除去開始
平成20年6月9日	3トレンチ東西・南北方向の畦検出 1トレンチ東端に深掘りトレンチ設定、セクション図作成
平成20年6月10日	1～3トレンチの畦の写真撮影
平成20年6月11日	3トレンチのA s-B残存部分を除去完了 遺跡全体の写真撮影を行う 各トレンチの平面図作成
平成20年6月16日	調査区に溜まった水を除去し、埋め戻し作業を始める。 調査で使用した機材を運搬し、倉庫に入れる
平成20年6月17日	調査区の埋め戻し完了
平成20年6月19日	調査用ユニットハウス撤去

2 遺跡の位置と環境

2-1 遺跡の位置と周辺の地形

倉賀野下新堀遺跡は、高崎市街地の南東約5kmの倉賀野町地内に所在する（第1図1）。

本市は上毛三山を背後に控えた関東平野の北端に位置している。本遺跡は、北から流れてきた烏川が碓井川と合流した後に流路を東へ向けた北岸に立地している。遺跡の東方には井野川が流れており、遺跡が烏川と井野川に挟まれた低台地上に所在していることが理解される。

2-2 周辺の遺跡

旧石器時代 本遺跡の周辺では、旧石器時代の遺構・遺物の検出は極めて少ない。本遺跡の東約6.5kmにある岩鼻坂上北遺跡（第1図2）では倒木痕中より木葉形を呈する砂質頁岩製尖頭器1点が出土しているのみである。旧石器時代の遺物の少なさは本遺跡周辺のみならず高崎市全体にもいえることで、市内における旧石器発見遺跡は数例を数えるのみである。

縄文時代 本遺跡周辺では、縄文時代遺跡の点在が認められる。本遺跡より北約2kmに所在する下中居条里遺跡（第1図3）では中期後半の住居跡および土坑が検出された。一方、南西約2kmに所在する下佐野遺跡のⅠ地区（第1図4）では、中期阿玉台式期から後期称名寺2式期にかけての住居跡18軒や土坑が検出されている。前期の土器片がわずかに検出されているが、集落形成の中心時期は中期後半以降とされる。また、Ⅱ地区（第1図5）では住居跡9軒と土坑が検出されており、中期後半から後期初頭にかけて集落が形成されていたことが分かる。さらに、南東約2kmの倉賀野万福寺遺跡（第1図6）、倉賀野万福寺Ⅱ遺跡（第1図7）においても縄文時代中期の住居跡や土坑などが検出され、本遺跡周辺における縄文時代集落の広がりを示唆している。

弥生時代 本遺跡周辺では集落遺跡は少ないが、北西約6kmには竜見町式土器の標識遺跡である竜見町遺跡（第1図8）が、北西約4.5kmには学史上著名な高崎競馬場遺跡（第1図9）が存在し、烏川左岸地域における弥生時代遺跡の中核を担っている。竜見町遺跡は森本六爾をはじめ後藤守一や杉原荘介が調査を行っており、遺構の検出こそなかったものの出土土器の観察から杉原は分類を行っている。高崎競馬場遺跡では競馬場工事の際など多くの遺物が出土することが度々あった。出土土器の多くは竜見町式であるが、初期の樽式の土器も見られる。正式な調査を経たものではないが住居跡と考えられる遺構も検出されており、中期末から後期初頭の集落と位置付けられている。北西約5.5kmには高関堰村遺跡（第1図10）や東沖・村前遺跡（第1図11）があり、竜見町式土器を多量に伴う環濠の一部、住居跡8軒と土坑を検出している。下之城町でも弥生時代遺物の散布があり、烏川東岸一帯に弥生時代中期を中心とした集落が展開した様子を窺うことができる。

古墳時代 本遺跡の周辺は、大形古墳に恵まれた地域である。遺跡の南西約0.5kmには墳長約171mの浅間山古墳（第1図12）が立地し、近接して大鶴巻古墳・小鶴巻古墳（第1図13）が群在する倉賀野古墳群がある。浅間山古墳や大鶴巻古墳では鱗付円筒埴輪などが検出されており、小鶴巻古墳を含めた三古墳は舟形石棺を持つとされる。規模に大小はあるが、4世紀末から5世紀初頭の西毛を代表する前方後円墳である。遺跡の東約7.5km、烏川に合流する井野川沿いの綿貫の地には、墳長115mの岩鼻二子山古墳（すでに消滅）や墳長94mの不動山古墳（第1図14）が所在しており、両古墳はやはり埋葬主体に舟形石棺を保有する前方後円墳である。その他にも高崎市内には、並榎町の上並榎稲荷山古墳や保渡田町の保渡田古墳群（井出二子山古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳）、八幡町の平塚古墳など舟形石棺を保有する90～100m級の前方後円墳が点在しており、5世紀を中心とした共通の埋葬体系を採用する広域首長連合が想定できる様相を呈している。また、遺跡の南西約1.5kmには4世紀末の大形円墳である長者屋敷天王山古墳をはじめ、横穴式石室を持つ漆山古墳や蔵王塚古墳などを含む佐野古墳群が所在している。東約1kmには、石槨式石槨を持つ終末期の円墳の安楽寺古墳（第1図15）がある。石槨内側には薬師仏が彫り込まれており、中世段階にはすでに開口していたことが考えられる。

集落遺跡では、本遺跡より西へ約3kmにある上佐野舟橋遺跡（第1図16）で4世紀後半から5世紀前半の住

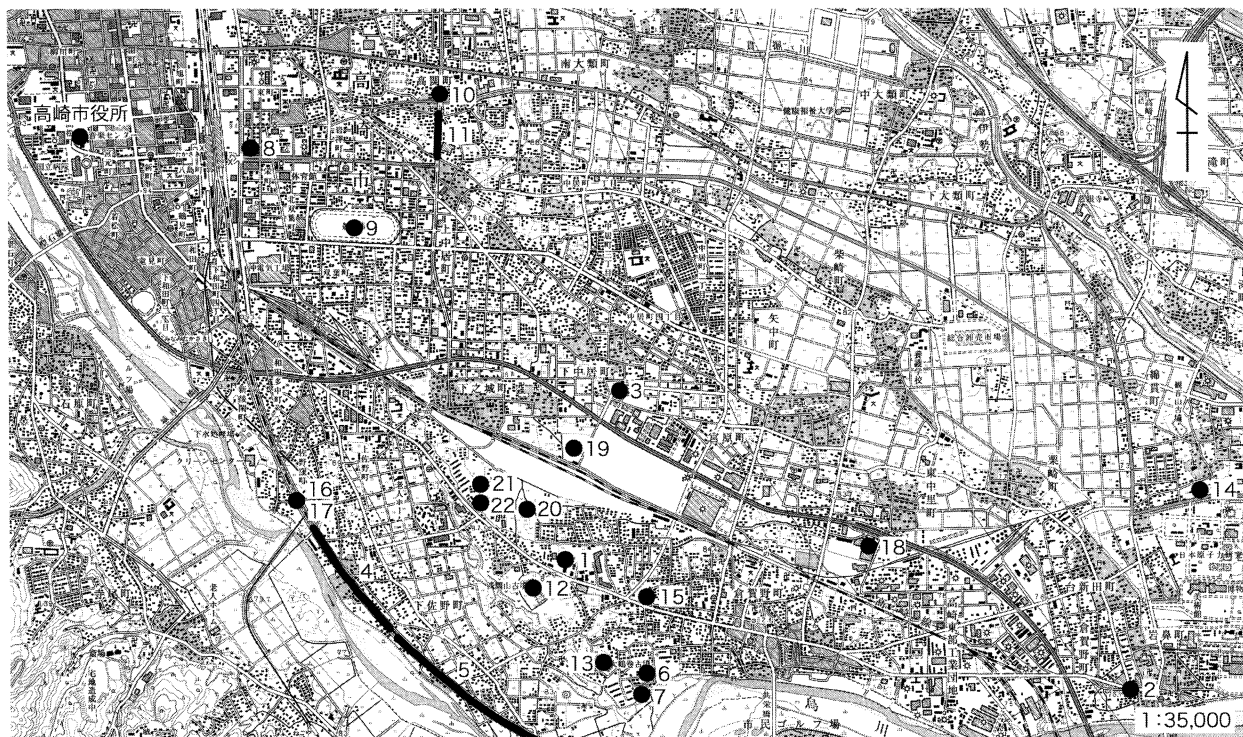
居跡2軒のほか、土坑や溝が検出されている。隣接する舟橋遺跡(第1図17)でも4世紀後半から5世紀前半の住居跡が検出されており、該期の集落が展開していた様子が窺える。下佐野遺跡Ⅰ地区では前期36軒、中期2軒、後期29軒と多くの住居跡が検出されている。その他には溝や土坑、方形周溝墓、古墳などが確認されている。下佐野遺跡Ⅱ地区では前期から後期にかけて25軒の住居跡が検出されており、集落が連綿と営まれていたことが理解される。倉賀野万福寺Ⅰ・Ⅱ遺跡では方形周溝墓や古墳と共に前期の住居跡13軒が検出されている。その他、東へ約3.5kmにある倉賀野中里前遺跡(第1図18)では後期の住居跡10軒、下中居条里遺跡Ⅲなどで前期7軒と中期3軒の住居跡、北へ約1.2kmの下之城村東遺跡(第1図19)や北へ約0.7kmの下之城村前Ⅴ・Ⅵ遺跡(第1図20)などでも住居跡が検出されており、当該期における集落の点在が確認できる。4世紀末～5世初頭紀段の西毛の盟主的古墳をはじめとして7世紀の精美な截石切組積石槨を持つ終末期古墳に至るまで、本遺跡を中心とした地域が古墳時代を通して活発であった事がよく理解される。佐野から倉賀野にかけての地は、ミヤケの存在が想定されるなど毛野国内の有数な地域であったことは疑うまでもないが、集落動態からも佐野・倉賀野を中心とした地域の特殊性が浮き彫りとなる。

奈良・平安時代 上佐野舟橋遺跡では古墳から平安時代にかけての住居跡を検出している。下佐野遺跡Ⅱ地区では平安時代の住居跡134軒、掘立柱建物跡18棟などを検出した。倉賀野中里前遺跡では住居跡10軒を検出しており、下中居条里遺跡では住居跡1軒を確認している。

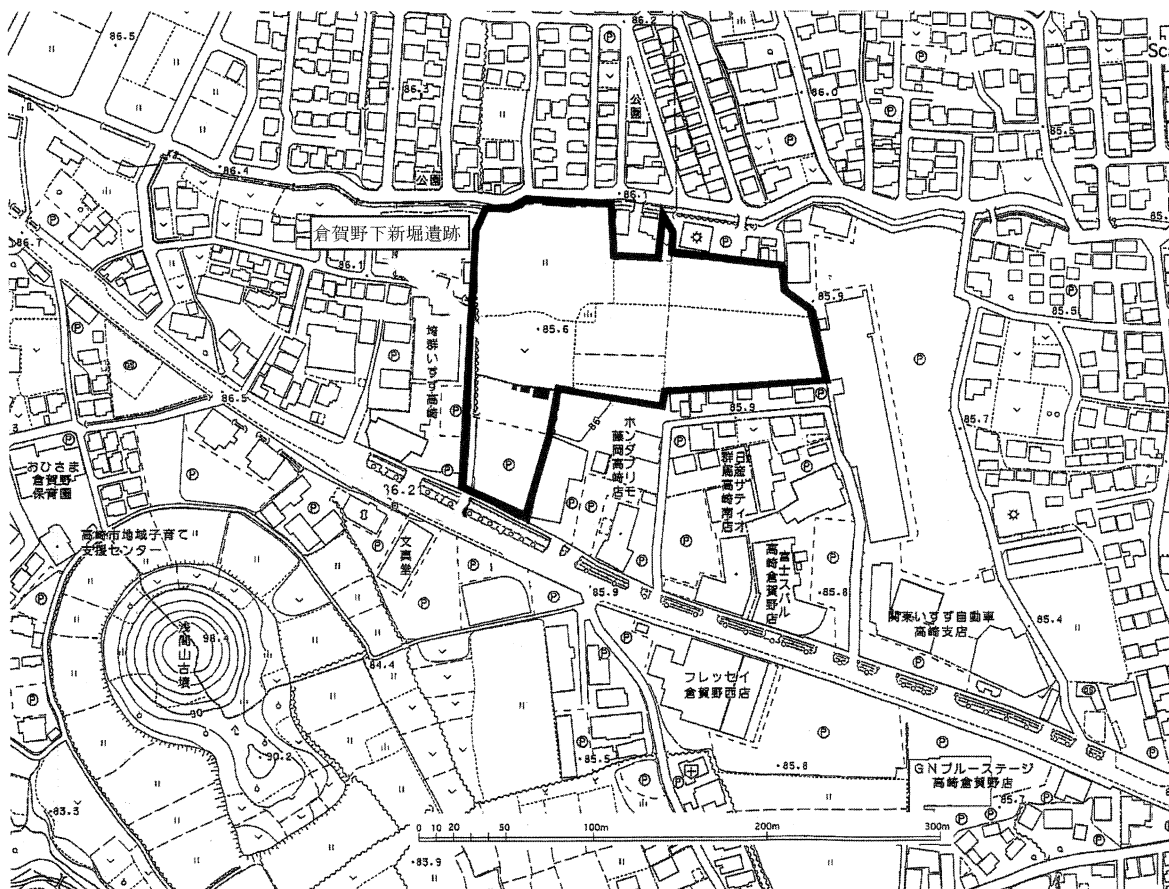
天仁元(1108)年に浅間山が噴火した際に降下した火山灰(As-B)に埋没した水田が本遺跡の他、下之城村東遺跡、下之城村前遺跡、下中居条里遺跡、下之城沖仲遺跡(第1図-21)、倉賀野統橋遺跡(第1図22)などで検出されている。これらの調査の蓄積により、本遺跡の立地する低台地上には広範囲に展開する平安時代の水田の存在が明らかとなりつつある。

参考文献

- (1) 群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『下佐野遺跡Ⅱ地区(1)』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集
- (2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団1989a『下佐野遺跡Ⅰ地区・寺前地区(1)』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団1989b『舟橋遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集
- (4) 山武考古学研究所1983『倉賀野万福寺遺跡』上越新幹線乗務員宿舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- (5) 下之城村東遺跡調査会1983『下之城村東遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (6) 高崎市遺跡調査会1992『上佐野舟橋遺跡』
- (7) 高崎市遺跡調査会1994『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- (8) 高崎市遺跡調査会1996a『上並榎稲荷山古墳』分譲住宅建設に伴う古墳周濠部の調査報告書
- (9) 高崎市遺跡調査会1996b『倉賀野中里前遺跡』
- (10) 高崎市教育委員会1992『高関堰村遺跡』都市計画道路3.3.9(環状線)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- (11) 高崎市教育委員会1993『高関村前遺跡』
- (12) 高崎市教育委員会1995『高関村前Ⅱ遺跡、高関東沖・村前遺跡』高崎市都市計画道路3・3・9(環状線)に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書
- (13) 高崎市教育委員会1996『下中居条里遺跡』都市計画道路下中居矢中線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
- (14) 高崎市教育委員会1998『下中居条里遺跡Ⅱ』都市計画道路下中居矢中線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2
- (15) 高崎市教育委員会2003『下中居条里遺跡Ⅲ』土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
- (16) 高崎市史編さん委員会1999『新編 高崎市史 資料編1 原始古代Ⅰ』



- | | | | |
|-----------------|--------------|---------------|----------------|
| 1. 倉賀野下新堀遺跡 | 2. 岩鼻坂上北遺跡 | 3. 下中居条里遺跡 | 4. 下佐野遺跡Ⅰ地区 |
| 5. 下佐野遺跡Ⅱ地区 | 6. 倉賀野万福寺遺跡 | 7. 倉賀野万福寺Ⅱ遺跡 | 8. 竜見町遺跡 |
| 9. 高崎競馬場遺跡 | 10. 高関堰村遺跡 | 11. 高関東沖・村前遺跡 | 12. 浅間山古墳 |
| 13. 大鶴巻古墳・小鶴巻古墳 | 14. 不動山古墳 | 15. 安楽寺古墳 | 16. 上佐野舟橋遺跡 |
| 17. 舟橋遺跡 | 18. 倉賀野中里前遺跡 | 19. 下之城村東遺跡 | 20. 下之城村前Ⅴ・Ⅵ遺跡 |
| 21. 下之城仲沖遺跡 | 22. 倉賀野続橋遺跡 | | |



第1図 周辺の遺跡(1/2500「高崎」より作成)及び遺跡の位置図(1/2500「高崎市都市計画基本図」より作成)

3 倉賀野下新堀遺跡の調査

3-1 調査成果の概要

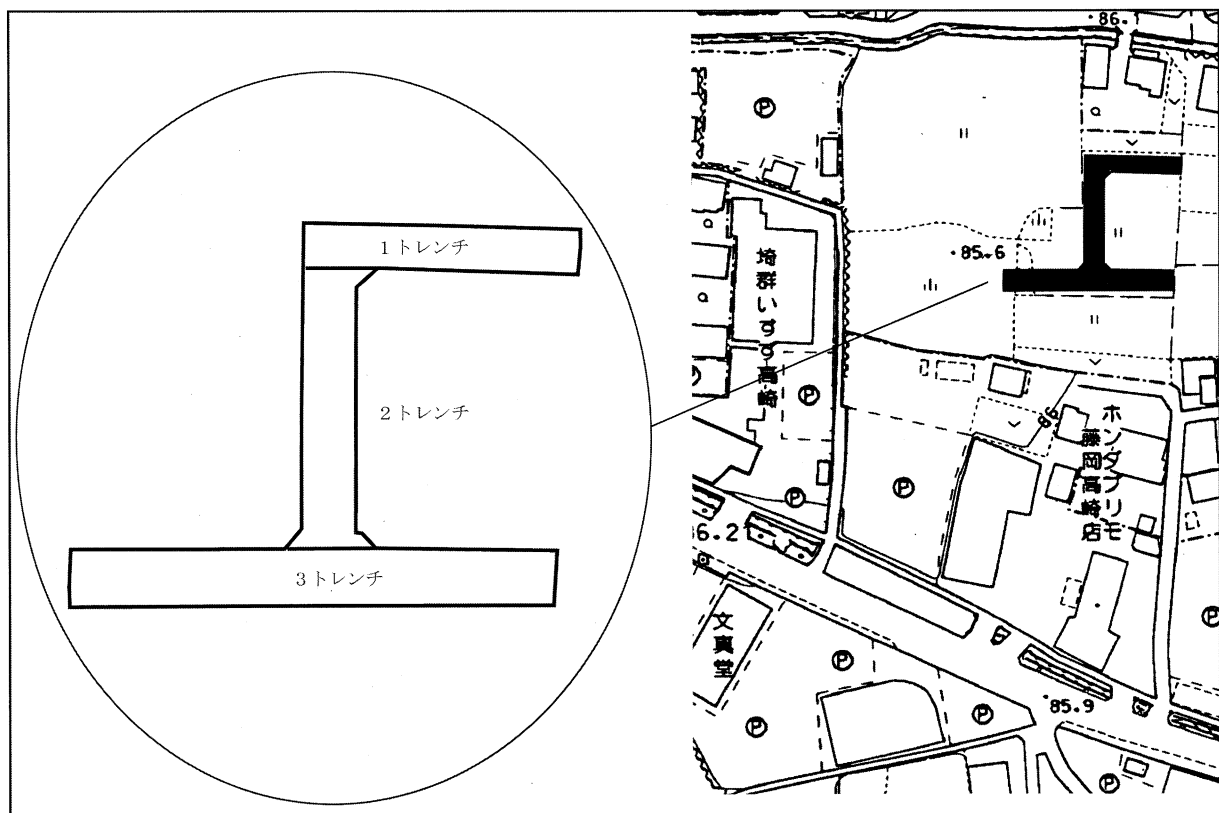
調査区を北から1～3トレンチの3区に分割して調査を進めた。

遺跡地はかつて水田として活用されていた土地で、地表下40cm前後で湧水が見られる。耕作による攪乱は、現地地表下10cm前後に収まっており、概ね地表下30cmで確認されたAs-B(浅間B軽石)には影響を与えていない。

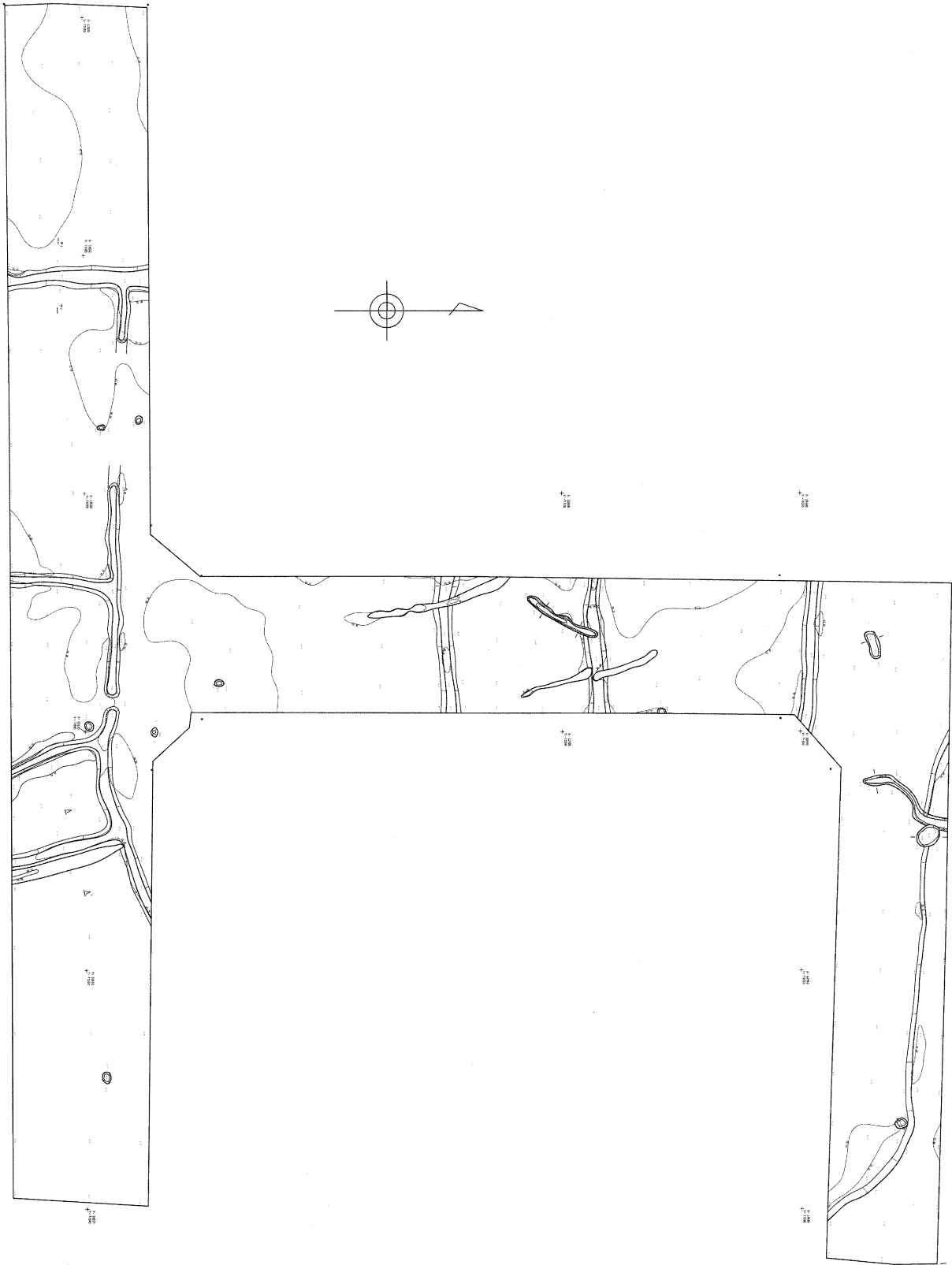
As-Bの残存状態は、北の1トレンチ東側と3トレンチ西側ではあまり良好でない。また比較的残りの良い2トレンチ及び3トレンチ中央部分でも、畦の高さが極めて低く遺構の確認がしにくい。そのため調査区全域から良好に畦が検出されたわけではなく、特に1トレンチにおいては北東に向かって土地の高まりが見られたのみで、明確な畦が検出できなかった。また2トレンチでは東西方向のみ畦が検出され、南北方向は確認できなかった。

3トレンチでは東西・南北方向の畦が検出されたが、突出度の低さから一部検出できなかった部分もあった。南北の畦間の幅は5.5m～8.3mを(2トレンチ)、東西は3.3m～6.5mを(3トレンチ)計測するが、畦が検出された地点における畦間の幅の狭さを考慮すると、調査区全域により多くの畦が検出される計算になる。所々に大きく畦間が空いている地点が見られるのは、水田の構造というよりむしろ畦の残存状態の悪さから来るものであろう。

遺跡の北側には井野川が、南側には烏川が北西から南東方向に向かって流れており、遺跡周辺にはこれらの河川から分岐した小河川が同じ方向に向かって流れている。As-B降下時も状況的には同様であったと推定され、遺跡の北西方向より小河川を利用して取水し、南東方向へ向かって排水したものと推定される。このことは、遺跡内で計測した等高線を見ると北より南が、西より東が低いことから証明される。



第2図 トレンチの配置と位置(1/2500「高崎市都市計画基本図」より作成)



第3図 調査区全体図(S= 1/250)

1 トレンチの調査

遺跡の北端を東西方向に伸びるトレンチである。

トレンチの東端に設置した1トレンチ東壁セクション図(第4図)を見ると、現地表面から下40cm前後でAs-Bの堆積が確認できる。

As-Bはトレンチほぼ全域に1cm～4cm堆積し、後世の耕作による削平を受けてはいないが、部分的に存在が確認しにくい所もあり残存状態はあまり良くない。特にトレンチ中央部分での堆積が悪く、As-B下水田面の認識がかなり困難であった。

As-Bはトレンチほぼ全域から確認されたため、丁寧に畦の確認作業を続けたが、1トレンチ内で明瞭な畦を認識することはできず、トレンチ東端から北西方向に僅かな土地の高まりが確認されたのみであった。

この高まりは水田面より2～4cm高く、東側が西側に比べて広がっている。これは高まりの南西に広がる水田域の北端を確認したとも考えられる。しかし2・3トレンチで検出された畦の高さが極めて低いことや1トレンチのAs-Bの残存状態が良好でないことから、1トレンチにおける畦の存在を否定することは難しい。

As-Bの上から小形の土坑3基と極めて浅い溝1条が検出された。いずれも覆土にAs-Bを多く含み、As-Bの上層である黒褐色土層(第4図 1トレンチ東壁セクション図の4層)の上面では遺構の掘り込みが確認できなかった。従ってこれらの遺構はAs-B堆積後あまり間を空けずに掘られたものと推定される。いずれの遺構もその機能に関連する遺物の出土が無かったことから、遺構の性格を認識することはできなかった。

1号土坑

1トレンチ東端から約5mの地点に存在する土坑である。平面形状はやや崩れた隅丸方形を呈する。1辺は約50cm、深さは18cmで覆土中に大量のAs-Bを含む。

遺構が存在するのは、先述のAs-B下の水田面が一段高くなっている部分の下端にあたり、水田との関係も考えられるが実態は不明である。遺物は出土していない。

2号土坑

1トレンチ中央西寄りに存在する土坑である。長軸が100cm、短軸が80cmの楕円形を呈し、深さは約20cmである。覆土にはAs-Bを含む黒褐色土が入り、遺物は出土していない。

1号土坑と同様にAs-B下の面が一段高くなっている所と水田面との間に存在しているが、1号土坑の壁が緩く立ち上がっているのとは異ってほぼ直に立ち上がっており、同一の遺構とは考えにくい。

1号溝と西壁の部分で接しているが、覆土がほぼ同一であり新旧関係は不明である。両遺構が同時に存在した可能性も考えられる。

3号土坑

1トレンチ西端に存在する隅丸長方形の土坑である。長軸120cm・短軸44cmで、深さは15cmを計測する。覆土はAs-Bを多く含み、壁はやや直立気味に立ち上がる。遺物は出土していない。

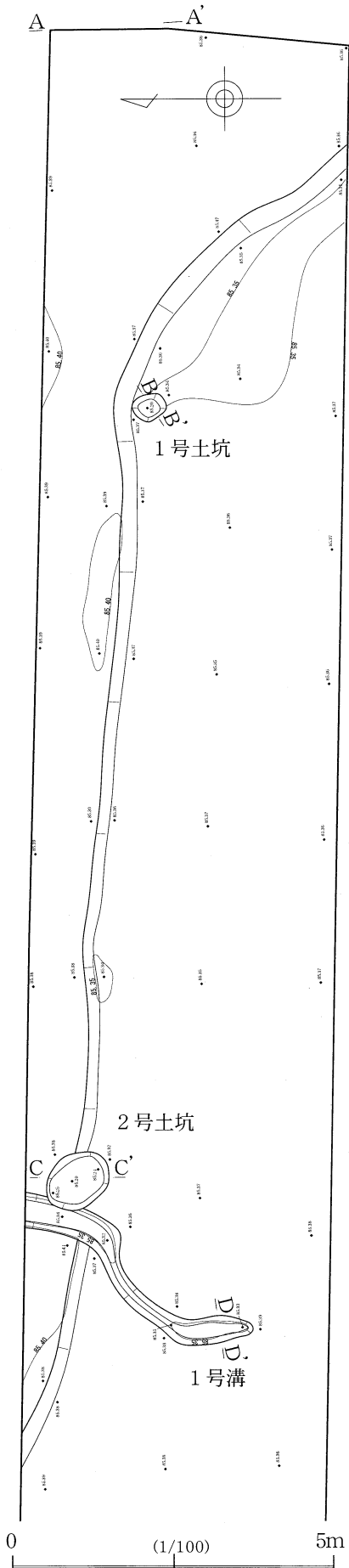
平面形状がしっかりとした形で検出されたので、自然地形とは考えにくい。遺構の機能は不明である。

1号溝

2号土坑の西に接して存在する浅い溝であるが、2号土坑との新旧関係ははっきりしない。

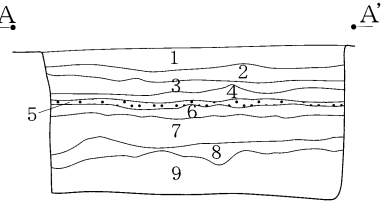
溝幅は28cmから52cmと差異があり、直線的に伸びるのではなく少しくねった形状を呈している。深さは深い所でも8cm前後と極めて浅く、遺物は出土していない。

壁の立ち上がりはかなり緩く、水路等の機能を有していたとは考えにくい。覆土がほぼ共通であったことから、2号土坑とのセット関係で考えていく必要があるかもしれない。



1 トレンチ東壁セクション図(S = 1/40)

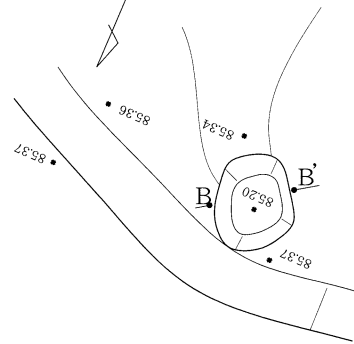
L=85.800m A



1. 黒褐色土(10YR 2/2) 現耕作土。粘性無くしまり弱い
2. 褐灰色土(10YR 4/1) φ 1~3mmの赤褐色粒子を含む
粘性無くしまり弱い
3. 灰黄褐色土(10YR 4/2) 赤~黄褐色の粒子が全体的に混入
粘性・しまり弱い
4. 黒褐色土(10YR 3/2) As-B粒が混入している
粘性やや弱くしまり強い
5. As-B軽石層
粘性の強い黄褐色の土が混入
6. 黒褐色土(10YR 2/2) 粘性強くしまりがやや強いAs-B下の
水田土壌
7. 黒褐色土(10YR 3/1) 黄褐色土混入。粘性・しまり強く
下位に黄褐色土集中
8. 灰黄褐色土(10YR 4/2) φ 1~3mmの黄褐色粒子が
全体的に混入。粘性・しまり強い
9. 灰黄褐色土(10YR 5/2) 粘性やや弱く、しまり強い。
砂利とφ 1~5mmの赤褐色の粒子
が混入している

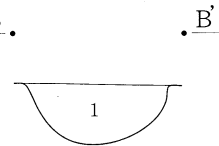
1号土坑平面図(S = 1/40)

X=31660
Y=71550



1号土坑セクション図(S = 1/20)

L=85.500m B

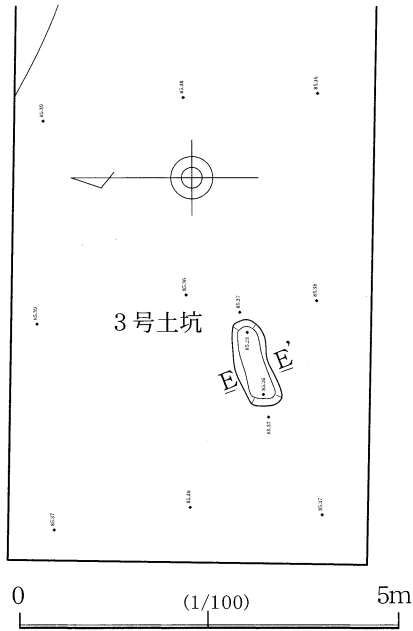


1. 黒褐色土(10YR 2/2) As-Bを多く含み、しまり強く
粘性弱い。下位に黄褐色の
粒子を含む

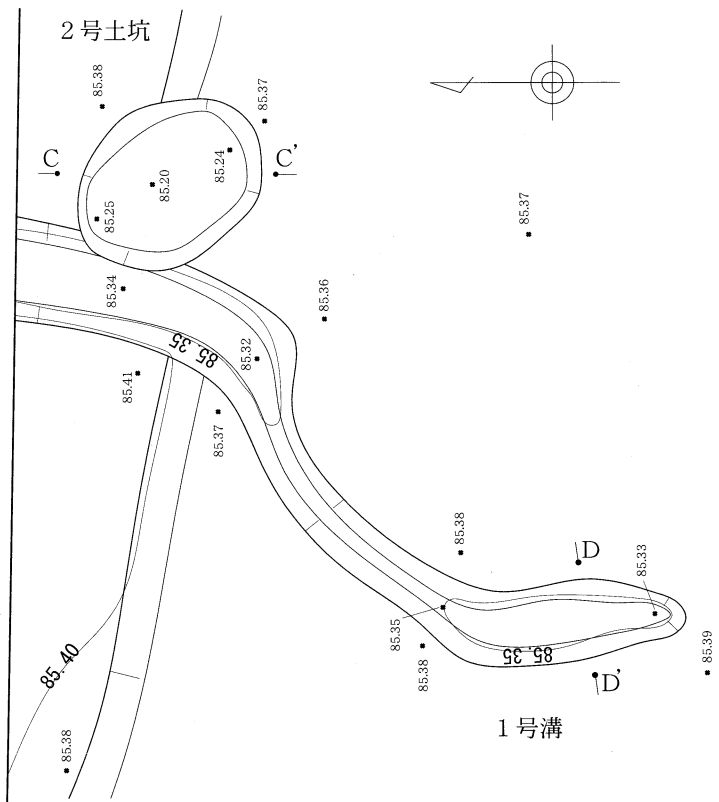
X=31660
Y=71560

第4図 1 トレンチ平面図 (S = 1/100) ① 1号土坑平面図及びセクション図(S = 1/40・1/20)

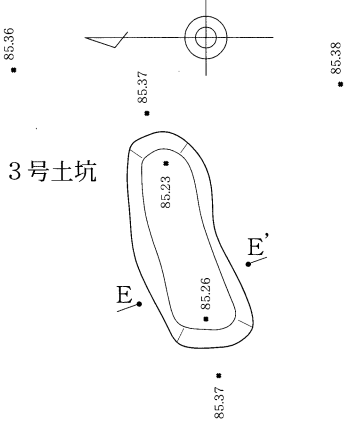
1 トレンチ平面図②(S=1/100)



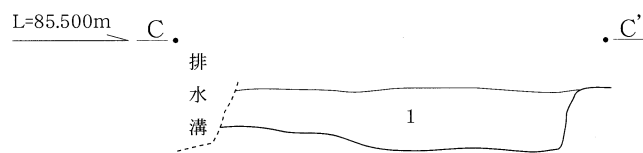
2号土坑・1号溝平面図(S=1/40)



3号土坑平面図(S=1/40)

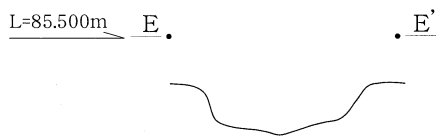


2号土坑セクション図(S=1/20)



1. 黒褐色土(10YR 3/2) ごく僅かにAs-B粒を含む。しまりやや弱い

3号土坑エレベーション図(S=1/20)



1号溝エレベーション図(S=1/20)



第5図 1 トレンチ平面図②(S=1/100) 2・3号土坑、1号溝平面図及び断面図(S=1/40・1/20)

2 トレンチの調査

1 トレンチの西端と南北方向に直交するトレンチである。As-Bの堆積は、1 トレンチと比較すると良好である。

1 トレンチでは確認できなかったAs-B下水田の畦が3条検出された。畦の主軸方位は東西方向のもののみで、南北方向のものは存在しない。幅の狭い南北方向のトレンチのため、並行する方位の畦に当たらなかったであろう。

北端の畦は上幅が28～36cm・下幅は44～70cmで、高さは1～4cmを計測し、ほぼ主軸は東西方向に伸びている。南に並行する畦との間隔は約6mである。

北端の畦の6m南に存在する畦は上幅が20～50cm・下幅は56～80cmで、高さは2～4cmを計測する。畦の主軸方位を見ると、西側部分が北端の畦と比較して若干南に向いているようだが、全体的にはおおよそ東西方向に伸びている。南に並行する畦との間隔は約5m30cmである。

南端の畦は上幅が30～50cm・下幅が62～100cmで、高さは1～4cmを計測する。畦の主軸方位は、北に並行する畦とほぼ同じ向きである。

4 号土坑

トレンチの北側東壁沿いに存在する円形の土坑である。径は26cm・深さは8cmで、覆土には大量のAs-Bが含まれている。1～3号土坑と同様遺構の機能は不明である。

3 トレンチの調査

2 トレンチの南端に接する東西方向のトレンチである。他のトレンチと比較してAs-B下水田の畦が良好に検出された。

東西方向の畦はトレンチの北端部分でほぼ東西に向かって伸びているが、途中から北へ向かって向きを変えトレンチの外へ抜けてしまう。また畦は2 トレンチ東壁の接合部分付近や更に西に向かって伸びる途中で途切れている。2 トレンチ東壁との接合部分の途切れについては水口である可能性も否定できないが、西側の途切れについてはAs-Bの状態が良好ではないことから消失してしまった可能性が高い。

東西方向の畦の幅を見ると西側よりも東側の方がしっかりした造りである。西側の上幅は20～26cm・下幅は46～58cmであるのに対し、東側の上幅は30～44cm・下幅は60～88cmを計測する。高さは西側で1～2cmであるのに対し、東側は3cm前後である。

南北方向の畦は4条検出されている。西側の2条は東西方向の畦に直交してほぼ南北に伸びているのに対し、東西方向の畦が北へ向きを変える部分より東側に存在する2条は、これに合わせて傾きを変えている。

南北方向西端の畦は上幅が30～60cm・下幅が60～96cmで、高さは2～3cmを計測する。

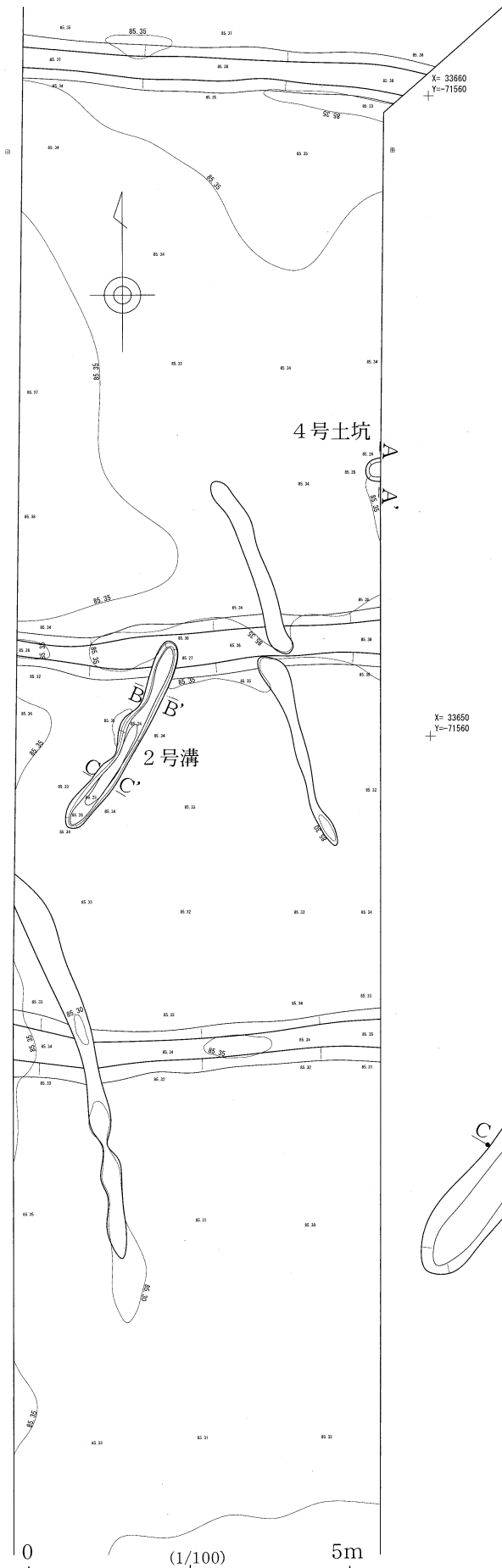
この畦より西に10m以上畦が確認されていないが、水田の西端とは考えられない。東側の畦との間隔は11m90cmであるが、恐らく畦が1条消失しているものと推定される。

西から2番目の畦は上幅が20～28cm・下幅が48～56cmで、高さは2～4cmである。畦の主軸方位は若干のずれは見られるものの、ほぼ南北方向である。東側の畦との間隔は、6m～7m50cmである。

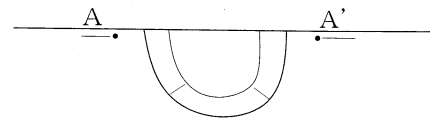
西から3番目の畦は東西方向の畦が北へ向かって傾くのに合わせて主軸方位を変えている。上幅は18～30cm・下幅は46～60cmである。東の畦との間隔は、3m30cmである。

東端の畦は3番目の畦とほぼ並行している。上幅は26～48cm・下幅は60cm前後、高さは1～2cmである。

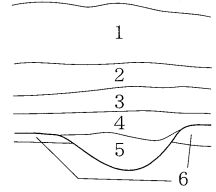
1～3 トレンチのAs-B下水田全体を見ると、水田面のレベルは1 トレンチ北西部分が標高85.35m(北東側の高い部分は85.40m)、3 トレンチ南東部分は85.25mで緩やかではあるが北西から南東に向かって傾いていたことがわかる。また、3 トレンチ東側の畦の主軸方向の傾きは、微地形に合わせて水田面を構成した結果であろう。



4号土坑平面及びセクション図(S=1/20)



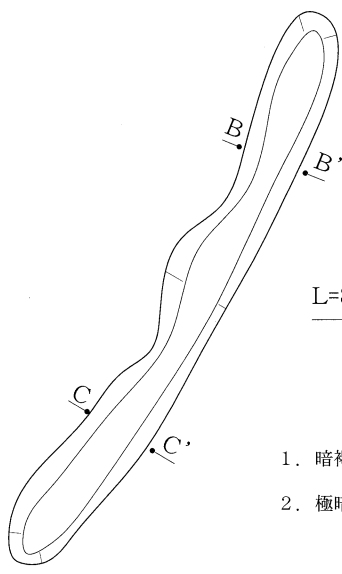
L=85.500m A. A'



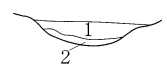
1. 黒褐色土(10YR 3/1) 耕作土 粘性弱くしまりやや弱い
2. 黒褐色土(10YR 3/2) 粘性やや弱くしまり強い。As-Bを多く含み
φ1~5cmの黄褐色土ブロックを少量と、
赤褐色の微細粒子を多く含む
粘性無くしまり弱い
3. 暗褐色土(10YR 3/3) 粘性やや弱くしまり強い。As-Bを多く含み
暗黄褐色土が混入する
4. 黒褐色土(10YR 2/3) しまり強く粘性無し。As-Bを大量に含み
暗褐色土を少量含む
5. 黒色土(7.5YR 2/1) しまり強く粘性無し。As-Bを多く含み
暗褐色土を少量含む
6. As-B軽石層

X=33650
Y=71560

2号溝平面図(S=1/40)及びセクション図(S=1/20)

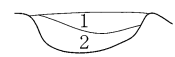


L=85.500m B. B'



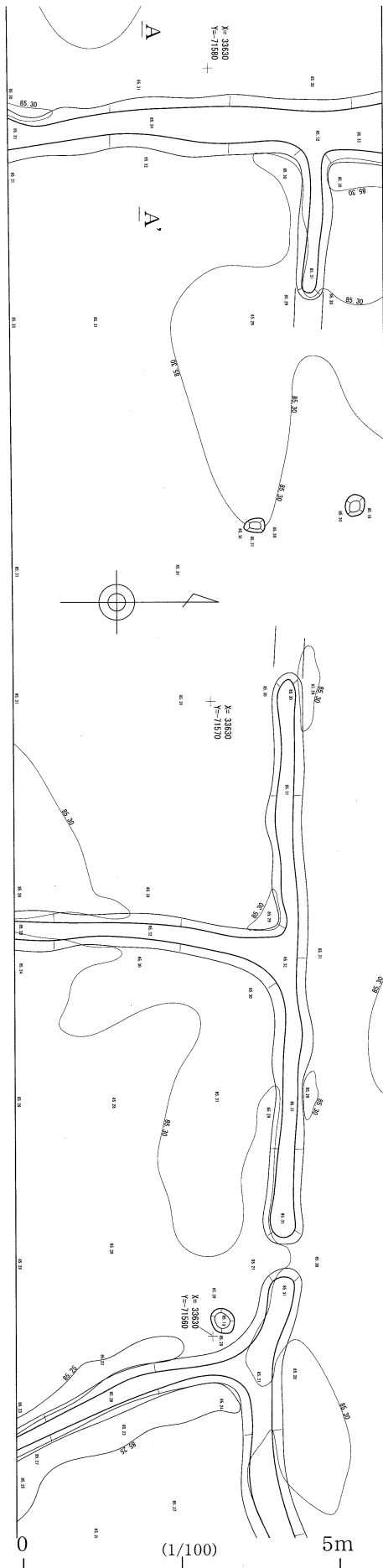
1. 暗褐色土(10YR 3/4) 粘性無くしまりやや強い
As-Bが主体となる
2. 極暗褐色土(7.5YR 2/3) 粘性やや弱くしまり弱い
As-B主体の土に粘性の強い土がブロック状に入る

L=85.500m C. C'



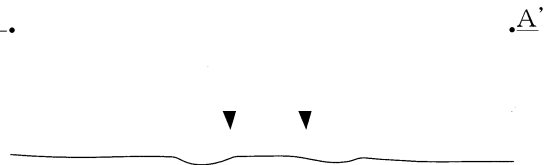
1. 暗褐色土(10YR 3/4) 粘性無くしまりやや強い
As-Bが主体となる
Bの1層よりやや明るい
2. 極暗褐色土(7.5YR 2/3) 粘性やや弱くしまり弱い
As-B主体の土に粘性の強い土がブロック状に入る

第6図 2トレンチ平面図(S=1/100) 4号土坑・2号溝平面図及びセクション図(S=1/40・1/20)

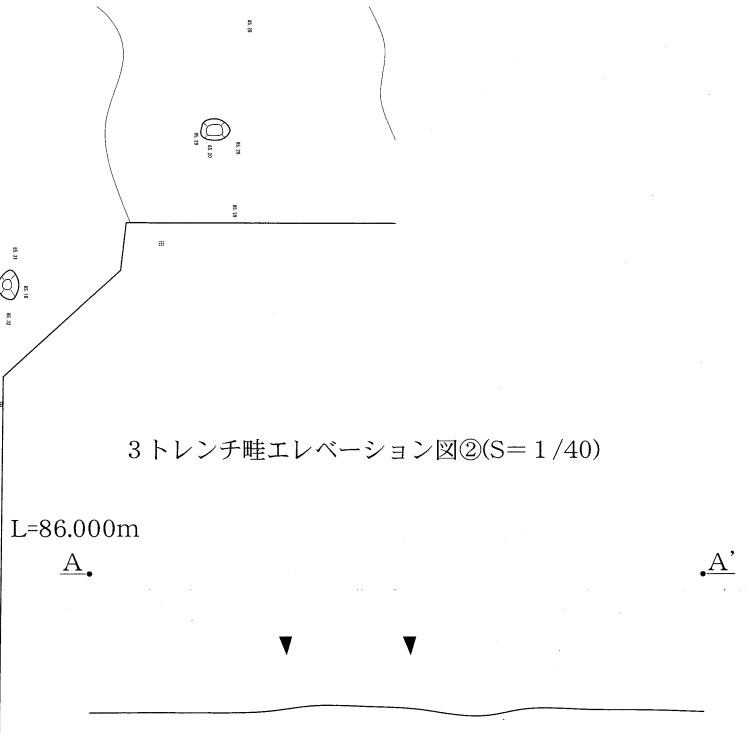
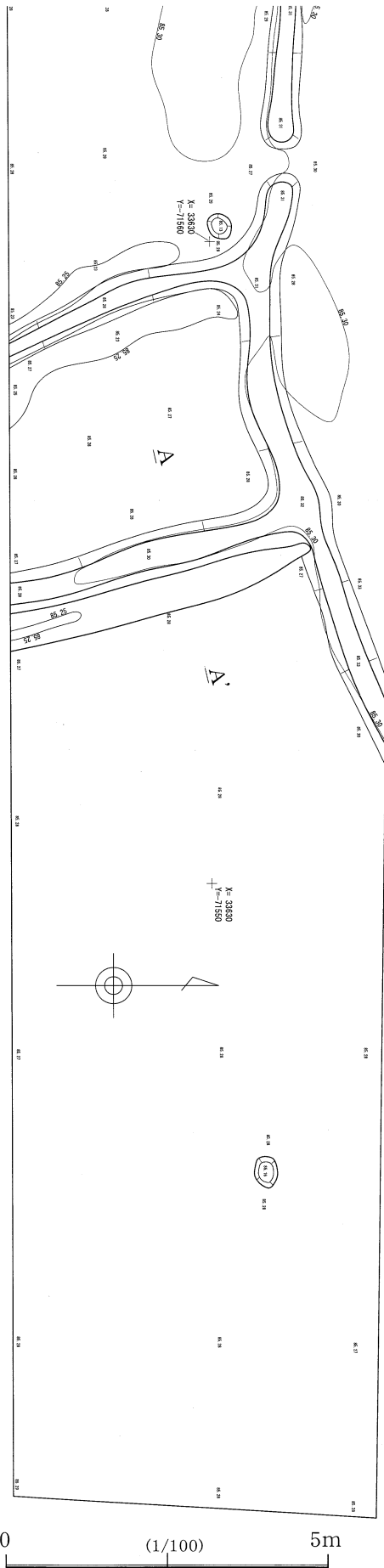


3 トレンチ畦エレベーション図①(S=1/40)

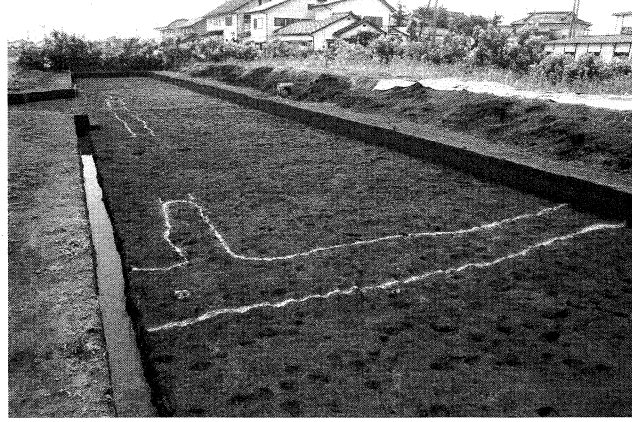
L=86.000m A.



第7図 3 トレンチ平面図①(S=1/100) 畦エレベーション図①(S=1/40)



3 トレンチAs-B軽石除去作業(東より撮影)



3 トレンチAs-B下水田(北西より撮影)

第8図 3 トレンチ平面図②(S=1/100) 畦エレベーション図②(S=1/40)

発掘調査報告書抄録

ふりがな	くらがのしもしんぼり						
書名	倉賀野下新堀遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 234 集						
編著者	黒田 晃 山本ジェームズ						
編集機関	高崎市教育委員会						
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町 35-1						
発行年月日	2009年3月31日						
ふりがな 名跡遺収所	ふりがな 地 在 所	コ ー ド		北 緯 東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (m ²)	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号				
くらがのしもしんぼり 倉賀野下新堀	ぐんまけんたかさきし 群馬県高崎市 くらがのまち 倉賀野町	10202	417	361802 1390211	2008.05.12 2008.06.19	600	土地区画整理
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
倉賀野下新堀	生 産	平 安	水 田 1 面	土師器小片	平安時代後期の浅間B軽石で埋没した水田を検出。 畦を検出。		



検出されたAs-B(白矢印部分 1トレンチ)



1トレンチAs-B上面の状況



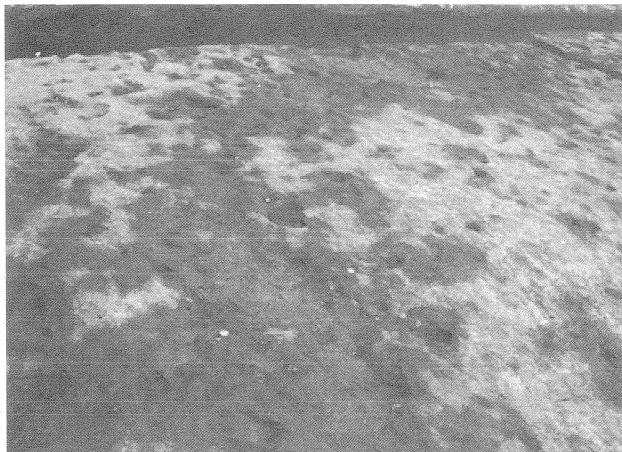
1トレンチAs-B除去作業



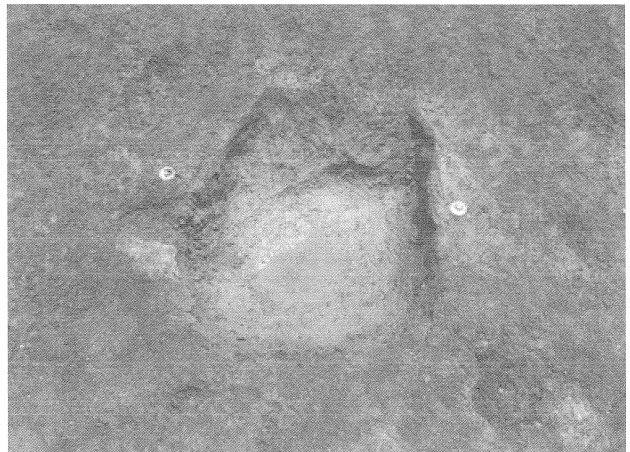
2号土坑・1号溝及びAs-B下水田の高まり(1トレンチ)



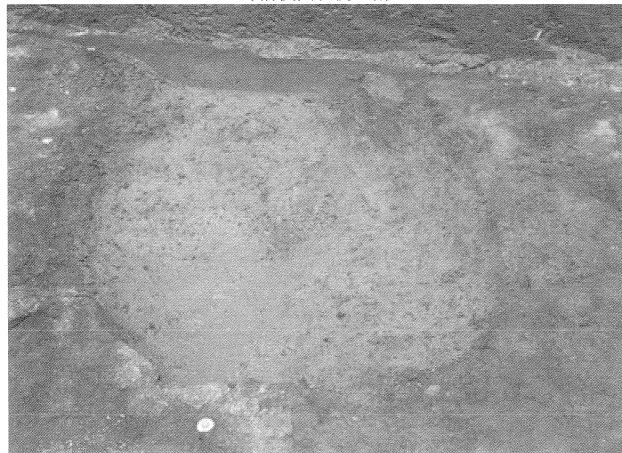
3号土坑及び2トレンチの畦



1号溝検出状況 南→



1号土坑検出状況 北西→



2号土坑検出状況 南→



3号土坑検出状況 北→



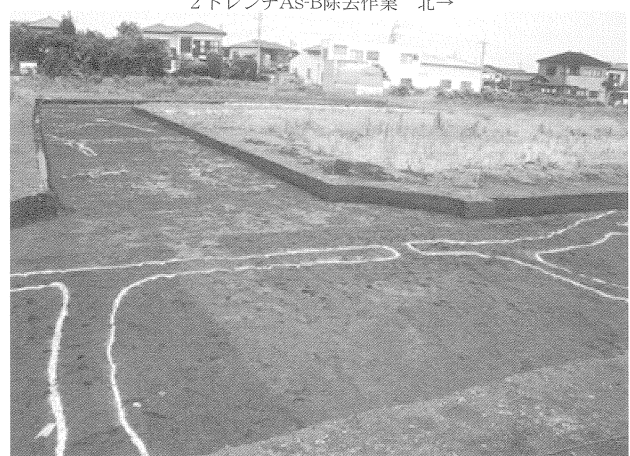
2トレンチAs-B検出状況 南→



2トレンチAs-B除去作業 北→



2トレンチAs-B下水田 南西→



2トレンチ及び3トレンチのAs-B下水田 南→



4号土坑 北西→



4号土坑



2号溝断面 南西→



2号溝 南西→



3トレンチAs-B除去作業 北→



3トレンチAs-B除去作業 北東→



3トレンチAs-B下水田 南西→



3トレンチAs-B下水田 南東→



3 トレンチAs-B下水田 西→



3 トレンチAs-B下水田 南西→

高崎市文化財調査報告書第234集
倉賀野下新堀遺跡

2009年3月31日 印刷

2009年3月31日 発行

編集 高崎市教育委員会

発行 高崎市教育委員会

印刷 (株)山口美術印刷
